
割れたワイングラス

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

割れたワイングラス

【Nコード】

N7353T

【作者名】

takosashi

【あらすじ】

谷口社長の家でのパーティ。玉木と井岡も招待された。しかし思わぬ事件が…

(前書き)

初めて、ちょっと長いものを書いてみました。ご感想、荒さがし、大歓迎です。いろいろな方の意見を伺いたいと思います。

有限会社谷口プレス of 社長宅では、夕食会が催されていた。
以前、工場で起こった傷害事件を解決した玉木と井岡も招待されていた。

2人はタクシーの中で、

「まあ、たまの息抜きだと思えば、いいじゃないですか」

「ワインにピザなんぞ、オレの性には合わん。悪いが適当なところで帰らせてもらうぞ」

「はは…まあ、僕は楽しませてもらいますよ」

「これはどうも、刑事さん」

「お招きありがとうございます、社長」

愛想のいい井岡とは対照的に、玉木は不機嫌そうだった。

「お二人とも、お飲み物は？　グルジアワインなどいかがでしょう？」

「焼酎があったら、くれないか」

玉木が言った。

「焼酎ですか。『村尾』がありますが」

社長の谷口が言うと、玉木の表情がぱっと明るくなった。

「それはいい。私はそれにします。井岡、お前は好きなワインを
いただけ」

「…はいはい」

2人の他に招かれていたのは、主に谷口プレス of 若い社員たちだった。

社長の娘、谷口由美を中心に、男たちの輪が出来ていた。

「はいはい、どいてどいて」

割り込んできた男は、吉田啓一。谷口プレスの子会社、吉田精工の御曹子だった。

「あー！ 啓ちゃん、来てくれたんだー！」

由美は啓一の首に腕を回した。

他の男たちは、つまらなそうに散っていった。

井岡は社長に尋ねた。

「彼は？」

「由美の婚約者です。半年ほど前から、ご縁がありました…」

井岡は人目もはばからずいちゃついている2人を見て、

（なるほどね…）

と、心の中でつぶやいた。

しかし、2人の様子を、じっと見ている男がいることにも、気づいた。

体格のいい、健康的な雰囲気の子だったけど、その視線には明らかに恨みがこめられていた。

（これは…）

由美は啓一の膝の上に手を乗せながら、啓一の持っていたワイングラスを取り、

「これ、飲んでいい？」

「いいよ」

「じゃあ、代わりにこれあげる」

由美は自分の持っていたワイングラスを啓一に渡した。

「ピロスマニ？ これ。初めて飲むよ」

「おいしいでしょ？」

「…なんか、変わった味だね」

「じゃあ、やっぱりこっちにする？」

由美が、ワイングラスを取り替えようとした時、

ぱりん…という音が響いた。

2人の様子を見ていた男が立ち上がり、2人に近づいていった。

「なあに？ 青木さあん」

由美はからかうように言い、ワインをぐいと飲んだ。

青木と呼ばれた男は、拳を震わせ、何も言わず、立っていた。

「由美、誰だよ、こいつ」

「んー、元カレ…かな？」

「どっか行けよ、バーカ」

「そうそう、何しに来たのよ。あーあー、グラス割っちゃって」

由美はほとんど空のグラスを、青木に差し出して、

「ほら、これあげる。あたしのキスマークつき。嬉しいでしょ？」

青木は掴みかからんばかりだったが、その場で振り返り、戻っていった。

「おい井岡」

いつの間にか、井岡の近くに玉木がいた。

「は、はい」

「帰るぞ。イヤなもん見ちまった。せっかくの焼酎がまずくなっ
たんでな」

「そうですか…」

啓ちゃん!!

突然、悲鳴があがり、井岡と玉木は振り返った。

啓一が床に倒れ、口から泡を吹いていた。

場がざわめき出した。

井岡と玉木は駆け寄り、啓一の体を調べた。

「だめです。死んでます」

「まさか：ワインに？」

玉木は、由美と啓一のそばにあったテーブルを見た。

2つのグラスが置かれていた。

1つは、空。

もう1つは、ワインが八分目ほど残っていた。

井岡は、

「由美さん、どっちが、啓一さんのワインです？」

「やだ：あたしのこと、疑ってるの？」

「そうは言ってませんよ。どちらです？」

「どちらって言われても：2人で交換して飲んだりしてたから：」

「これは、おそらく即効性の毒だな」

「すると、この2つのうち、どちらかに：：？」

2人は同時に由美を見た。

「なんであたしが？！ 同じワイン飲んだのよ？」

すると、青木が近づいてきて、

「：俺です、刑事さん」

玉木は、

「なんだって？」

「由美が毒なんか入れるわけがない。俺は2人のやり取りをずっと見てた」

「これ、飲んでいい？」

「いいよ」

「じゃあ、代わりにこれあげる」

由美は自分の持っていたワイングラスを啓一に渡した。

「ピロスマニ？　これ。初めて飲むよ」

「おいしいでしょ？」

「…なんか、変わった味だね」

「じゃあ、やっぱりこっちにする？」

「由美はこいつの飲んでいたワインを取って飲んだ。もし毒が入っていたなら、由美も死んでいたはずだ」

「なによ、由美なんて、気安く呼ばないでよ」

「…」

井岡は、中身の残っている方のグラスを指差し、

「玉木さん、これ、飲んでみてください」

「あ？　…ああ」

玉木は一口、口をつけると、

「なんだ、こりゃ？　ワインってのはこういう味なのか？」

「たぶん、味の素かなんかが入ってるんでしょう」

「じゃあ何か？　味の素で、人が死ぬってのか？」

「いえ…毒の入っているワインなら、一口飲めば気づく…そう言いたかったんです」

「…」

「人を毒殺するには、一定の量を、一気に飲み干させる必要があります」

「そうだな…」

「もし…ワインが一口ぶんくらいしか、残っていなかったとしたら…？」

「ぐいっと、飲んじまうだろうな」

井岡は由美を見つめる。

由美は、震えていた。

そして井岡は…青木を見た。

青木は直立不動のまま、目を閉じていた。

「由美さん、たいした演技だが…相思相愛の二人だということは、ごまかせませんよ」

井岡は言った。

「青木さんは元カレではない。由美さんの大切な恋人です。今も、そして、これからも…」

玉木は、

「どうということだ？」

「由美さんは青木さんと添い遂げたかった。意に染まぬ婚約者を押し付けられてもね」

「それが…この男か？」

玉木はいまや死骸と化した啓一を指差した。

「そうです…ワインを交換して飲みあい、一口で飲み干せるほど残してから、青木さんがキレてグラスを叩きつけ、2人のところへやって来る。打ち合わせどおりにね」

「なんと…じゃあ、この味の素入りのワインは…」

「啓一さんが、まずくて飲めない、と言うように作った…いわば、ダミーです」

「…」

「毒は、一口でワインを飲み干せる状態で入れられた…ほんの少量で死ぬ、強力なものをです」

（ほら、これあげる。あたしのキスマークつき。嬉しいでしょ？）

「それが、これから毒を入れる、という合図。修羅場に周りは気

をとられ、気づかなかった。そして啓一さんは…」

由美が言った。

「そうよ…一氣にぐいっと飲み干してくれたわ。味も何もわからずだね」

「やめろ、由美！」

青木が叫んだ。

「サイテーの男よ、こんなやつ！ だから、あたしが殺したの！」

井岡は呆然としていた谷口をいたわるように、

「社長、これは、ある意味で、あなたが招いた悲劇でもある」

「はい…」

「由美さんが罪を償ったら、2人のこと、許してあげてください」
「…」

玉木と井岡、そして谷口社長は、遠ざかるパトカーを見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353t/>

割れたウィングラス

2011年10月9日01時49分発行